広島大学大学院教育学研究科紀要　第二部　第51号　2002　351－356

非対格性・非能格性の概念に基づいた自動詞の分類に関する研究の動向

松　岡　知津子

(2002年9月30日受理)

Trends in the classification of intransitive verbs based on unacusativity and unergativity

Chizuko Matsuoka

In the study of languages such as Dutch, English, or Italian, unaccusativity and unergativity are two categories into which intransitive verbs may be classified, and which serve to explain various linguistic phenomena. According to many linguists, these notions can also be applied to Japanese. The aim of this paper is to review the historical background of the matter and the tests for unergativity and unaccusativity proposed in various studies, as well as to take an in-depth view at the direction of recent studies on unaccusativity and unergativity in Japanese.

Key words: intransitive verb, unaccusativity, unaccusative verb, unergative verb, telicity, volitionality
キーワード：自動詞，非対格性，非対格動詞，非能格動詞，完結性，意志性

0．はじめに

非対格性（unaccusativity）および非能格性(unergativity)の概念は，自動詞の研究において，オランダ語，英語，イタリア語など様々な言語において自動詞を二分する概念として用いられ，様々な現象を説明するために使用されている。この概念は多くの研究者によって日本語でも検討されてきたものであり，複合動詞や結果構文，スル構文といった様々な現象との関連が検討されている。本稿では，自動詞を分類する基準である非対格性と非能格性について歴史的背景を概観しながら，非対格動詞および非能格動詞の性質，そしてこれまでに色々な研究者によって主張されてきたテスト法を再検討することで，近年行われている非対格性・非能格性の概念に基づいた自動詞の分類に関する研究の動向を探る。

1．2つのタイプの自動詞と非対格性

従来，動詞は他動詞と自動詞に二分されているといわれてきた。しかし，近年，自動詞には二つのタイプがあるという主張がある。以下の例を参照されたい。

(1) There came to Japan a foreigner.

(2) *There talk a student to his teacher.

上記の例は一般に there 構文と呼ばれているものであり，“There + V + S” という語順をとるが，どのような動詞にも当てはまるものではない。(1)で用いられている自動詞 “came” を含む文においては，there 構文に入ることができるが，(2)においては “talk” は there 構文に入ることができない。このように，動詞によって文法性に差がでてくるような現象は，英語に限らず日本語においても観察されると主張されてきた(影山1993；三原1998など)。以下の例を参照されたい。

(3) 湖がカチカチに凍った。

(4) *赤ん坊がクタクタに泣いた。(赤ん坊が泣いてクタクタになった)

(3)で用いられている自動詞「凍る」を含む文では，「カチカチに」という結果副詞を用いた文が成立するが，(4)の「泣く」を含む文では(3)のような結果副詞を付加することができない。また，同じように自動詞を用いた文で文法性に差がでてくるものとして以下のような例もある。

(5) 水が蒸発する→*水が蒸発させられた
(使役受身の形にすることができない)
(6) 二人が離婚する→二人が離婚させられた
(使役受身の形にすることができる)

(5)で用いた「蒸発する」も，(4)で用いた「離婚する」も，自動詞であるが，一方の自動詞「離婚する」は使役受身にすることができ，もう一方の自動詞「(水が)蒸発する」の場合は使役受身にすることができない。

このように，自動詞に分類される文であっても，文法性に差が出てくることが，非対格性の概念によって説明できると主張されてきた。

非対格性の概念とは，そもそも能格言語(ergative language)からうまれたものである。能格言語とは，他動詞文の主語が，自動詞文の主語と他動詞文の目的語の格とは別の格によって区別される言語のことで，バスク語やアメリカンインディアン諸語といった言語に見られるものである。能格言語では自動詞の主語と他動詞の目的語が絶対格(absolutive)と呼ばれる同一の格を表示する。このように，自動詞の主語と他動詞の目的語が同等の扱いを受けること，および両者の関係を「能格性」と呼ぶようになった。一方，英語や日本語といった多くの言語では，自動詞の主語と他動詞の主語が主格(nominative)という同一の格で表わされており，このような言語を対格言語(accusative language)と呼ぶ。しかし，対格言語である英語の中でも "break" や "open" といった動詞は自動詞の主語と他動詞の目的語に同じ要素を取るという点で能格性を示している。Perlmutter & Postal (1984)は，このような英語の能格動詞を非対格動詞と呼び，さらに他動詞用法を持たない自動詞でも，非動作主を主語に取る動詞，例えば "happen" や "exist" といった自動詞も非対格動詞として分類した。このような自動詞の主語はもともと基底構造では目的語として生成され，表層構造ではじめて自動詞文の主語になると主張した。以下に，Perlmutter&Postal(1984)の示した非対格動詞および非能格動詞の例とその性質を挙げる。

Perlmutter & Postal (1984) による
非対格動詞・非能格動詞の特徴

非対格動詞の特徴

① 形容詞またはそれに相当する状態動詞：
be　など
② 対象物を主語にとる動詞：
burn, fall, drop, sink, boil, darken, freeze など
③ 存在ないし出現を表す動詞：
appear, happen, exit, occur, disappear, last など
④ 五感に作用する非意図的な現象：
shine, sparkle, glitter, smell, stink, jingle など
⑤ アスペクト動詞：
begin, start, stop, cease, continue など

非能格動詞の特徴

① 意図的ないし意志的な行為：
work, play, speak, smile, skate, swim など
② 生理的現象：
cough, sneeze, hiccough, belch, vomit など

このような自動詞の文への現れ方に関する違いについて述べたものが非対格性の仮説(Unaccusative Hypothesis)であるといわれている。影山(1993)によると，二つのタイプの自動詞とは，つまり(1)，(3)，(5)のように①意図を持たず，受動的に事象に係わる対象(Theme)を主語にとり，その主語が他動詞文の目的語位置に現れるような自動詞で非意図的事象を表すものと，(2)，(4)，(6)のように②意図的に動作を行う動作主(Agent)を主語にとるような自動詞のことである[1)]。このような二つのタイプの動詞は，意味的に異なるだけでなく，構造上にもその違いが認められるという。詳しくは影山(1993)を参照されたい。

2．非対格性を議論する立場

非対格性を議論する際，自動詞がどのように非能格動詞と非対格動詞に二分されるか，そして何が非対格性の性質を決定付けているのかという論点がある。前者の問いに対しては，おおよそ以下のような見方があると考えられる。

2.1. 統語的な立場

Perlmutter (1978) やBurzio (1986)，Rosen (1984) に

代表される立場で，非能格と非対格の違いは基底構造(underlying structure)の違いであるという考え方。「非能格動詞」と「非対格動詞」の主語が統語的に異なる働きを持つことや，there 構文，「数量詞の遊離(quantifier floating)」といった語順の問題などが統語的な立場をとる必要性を支持するものとして挙げられている[2)]。

2.2. 語彙意味論的な立場

Van Valin(1990)や Kishimoto(1996)に代表される立場で，非対格性は動詞の語彙的な意味と相関しているというもので，主な観点としては，意志性(volitionality)や完結性(telicity)といったものがある。

2.3. 中間的な立場

影山(1993)や Levin and Rappaport Hovav(1995)に代表される立場で，統語的な立場を認めつつも，本来は意味的な性質に基盤を置いているという考え方である。

統語的な立場と語彙意味論的な立場の主張は，まったく逆のものということではない。初めて非対格性について言及したとされる Perlmutter(1978)も，統語的な立場をとりながら，実際に分類された動詞を見てみると，意志の有無つまり意志動詞(volitional verb)か非意志動詞(non-volitional verb)かということと相関があるようだと指摘している。

3. 非対格性・非能格性のテストとその問題点

前節では，非対格性が統語的な立場からも語彙意味論的な立場からも検討されていることを概観したが，では，それはどのようにして知ることができるのであろうか。影山(1993; 1996)，Kishimoto(1996)やその他多くの先行研究において，非対格性についてのテスト法が議論され，非対格性および非能格性をテストする方法が紹介されている。

3.1. 非対格性のテスト

1）N-V 複合名詞の可能性　(影山 1993)

非対格動詞のみ主語が複合語内に入ることができる

非対格動詞　心変わり，胸やけ，地すべり，崖崩れ，雨漏り，気乗り

非能格動詞　*私働き，*学生遊び(学生が遊ぶこと)

2）数量詞の解釈（影山 1993；三原 1998）

非対格動詞のみ主語の数量としての解釈を許す

非対格動詞　たくさん産まれた＝産まれた子供がたくさん

非能格動詞　たくさん遊んだ＝遊んだ量がたくさん≠遊んだ人がたくさん

3）格助詞の脱落　(影山 1993)

非対格動詞のみ主語の「が」を省略することができる

非対格動詞　あの子供，何度でお湯＿沸くか知らない。

非能格動詞　*テレビで中核派＿デモするの見たよ。

4）結果の副詞の解釈　(Miyagawa 1989他)

非対格動詞のみ結果構文が成立する

非能格動詞　*赤ん坊はクタクタに泣いた。(泣いてクタクタになった)

非対格動詞　グラスが粉々に割れた。

5）「ている」の解釈　(Tsujimura 1991他)

非対格動詞の場合のみ結果の意味を表す

非対格動詞　彼は死んでいる。(結果)

非能格動詞　彼は泳いでいる。(動作の継続)

6）「かけ」構文の可能性　(Kishimoto 1996)

非対格動詞のみ「V-しかけの」が可能)

非対格動詞　死にかけの金魚

非能格動詞　*泳ぎかけの人

7）終結性(telicity)　(杉岡 1998他)

非対格動詞のみ「—時間で」等の句と共起が可能

非対格動詞　その患者は病院に搬送されて1時間で死んだ。

非能格動詞　*彼は1時間で働いた。

3.2. 非能格性のテスト

8）「動名詞＋する」におけるヲ格挿入　(影山 1993)

非能格動名詞のみヲ格を許す

非対格動詞　*会長が死去をした。

非能格動詞　ゆっくり深呼吸をしなさい。

9）総称的 PRO 主語の生起　(影山 1993)

非能格動詞のみ PRO 主語を総称の意味で使える

非対格動詞　夜中に PRO 騒ぐことは禁止されている。

非能格動詞　*夜中に PRO 現れることがよくある。

10）間接受身の可能性　(影山 1993)

非能格動詞のみが間接受動化を許す

非対格動詞　*突然，大地震に起こられて，動転した。

非能格動詞　隣の住人に夜遅くまで騒がれて

困った。

11) 使役受身の可能性 (影山 1993)

非能格動詞のみが使役受動化を許す)

非対格動詞 *水が蒸発させられた。

非能格動詞 子供が働かされた。

12) 命令形にできる

非能格動詞のみ命令形が可能

非対格動詞 *(窓を見て)割れろ！

非能格動詞 働け！

13)「てもらう」形の可能性 (影山 1996)

非能格動詞のみ「てもらう」が可能になる

非対格動詞 *枯葉に落ちてもらった。

非能格動詞 妹にお使いに行ってもらった。

しかし，松本(1998)はこれらのテスト結果が一致しないということを指摘している。また，松岡(2001)で行ったいくつかのテストでも，必ずしも結果が一致せず，テストによって非対格性を測ることはできなかった[3]。松本(1998)は，結果の不一致の原因について，上記のテストが非対格性あるいは非能格性をテストするものとしてふさわしくない可能性があることに加えて，Levin & Rappaport Hovav(1995)らが指摘した「非対格性と非能格性にとってのテストが必要条件であっても十分条件ではない」という可能性を否定することになると指摘する[4]。なぜなら，この種の原因によって生じる不一致とは，ある非対格性のテストでは「非対格」と認定される動詞が，他の非対格テストに合格しないというケースのことであるからである[5]。また，テスト結果が分かれることに対して，一つの動詞が非能格としての用法と非対格としての用法を持つ可能性を指摘するが，その可能性だけでは表の不一致を説明するには不十分だという。それは，同一の非対格性のテストと非能格性のテストに合格する場合があるからだという。以下に示すものが，一つの動詞が非対格のテストにも非能格のテストにも合格する例の一部である。

(7) 親しい友人にたくさん死なれてしまった。
(間接受身と数量詞)

(8) 若いカップルもたくさん離婚させられた。
(使役受身と数量詞)

(9) 壁にぴったりくっつけ。
(命令形と結果の副詞)

このように，上記のテストには矛盾点があり，これら全てのテストで非対格性をテストすることはできないようである。それでは一体，非対格性を決定付けるものは何だろうか。そして，それらはどのようにしてテストすることができるのであろうか。

松本(1998)は，非能格性の意味基盤を意志性，非対格性の意味基盤を完結性とした上で，自動詞を非対格動詞/非能格動詞といった二律背反の動詞に分類できるのかという問題を提示した。松本(1998)は，この問題に対する答えは何も述べていないが，岸本(2000)が「意志性」「完結性」と非対格性の関係について述べている。岸本(2000)は，語彙意味論的立場から「意志性」と「完結性」という二つの要因を認め，日本語の非対格性の要因を決定付けるには，これらの要因が両方そろう必要があるという主張を行っている。

4．岸本(2000)の「かけ」構文

岸本(2000)は，非対格性に必要な要因としてKishimoto(1996)で主張した「意志性」と，それに対してToratani(1997, 1998)などによって論じられた「完結性」の観点からの議論を検討し，問題点を以下のように指摘した上で，非対格性を決定するには「意図性」と「完結性」のどちらの要因も満たすことが必要であることを導き，Kishimoto(1996)の「非対格性の決定には意志性が必要である」との主張を改善し，改めて「かけ」構文を提唱した[6]。

「かけ」構文とは，「飲みかけのビール」のように，動詞の連用形に「かけ」というアスペクト接辞を付加して名詞化された表現が，他の名詞を修飾する，あるいは名詞述語として他の名詞を叙述する構文を指す7)。非対格性の仮説とは，あるタイプの自動詞の主語が他動詞の目的語と同じ特性を示すということであり，これは主語が他動詞の主語と同じ振る舞いをするタイプの動詞とは異なるものであった。以下の例を見ると，「かけ」構文が修飾するのはヲ格の目的語であることが分かる。

(10) 切りかけの大根/*切りかけのお母さん，
渡しかけの手紙/*渡しかけの主人

(11) *吠えかけの犬，*働きかけの作業員，
腐りかけの野菜，おぼれかけの子ども

(10)は他動詞，(11)は自動詞を「かけ」構文で表したものである。(11)をみれば分かるように，「かけ」構文を用いると，自動詞の例では文法性に差が出てくることが分かる。このように，岸本(2000)は「かけ」構文が非対格動詞/非能格動詞を見分けるのに適していると主張するが，岸本(2000) は，以下のように，完結性と意志性だけを単独に用いるだけでは非対格性を測ることはできないと主張する。

完結性

Vendler(1967)の動詞分類のうち，完結性のある達成動詞(achievement verb)，到達動詞(accomplishment verb)に含まれるものであり，これらの動詞が非対格動詞として働くというもの。実際，これらの動詞は「かけ」構文に現れやすい。

(12) 達成動詞
　a．死にかけの虫
　b．枯れかけの花
(13) 到達動詞
　a．作りかけのプラモデル
　b．書きかけの手紙

しかし，活動動詞(activity verb)においても，「かけ」構文が成立する場合もあり，成立しない場合もある。

(14) 活動動詞
　a．転がりかけのボール
　b．動きかけの時計
　c．鳴りかけの非常ベル
　d．*働きかけの労働者
　e．*踊りかけのダンサー
　f．*走りかけのランナー

意志性

他動詞や非能格自動詞のように，動作主が意志をもって行う動詞の場合，「かけ」表現が主語を修飾することができないというもの。

(15) 他動詞
　a．読みかけの本/*読みかけの正夫
　b．解きかけの問題/*解きかけの受験生
(16) 意志性をもった自動詞
　a．*吠えかけの犬
　b．叫びかけの観客
(17) 意志性をもたない自動詞
　a．腐りかけの野菜
　b．枯れかけの花

しかし，意志性をもたない動詞においても，「かけ」構文が成立しない場合がある。

(18) *降りかけの雨

以上のように，意志性と完結性それぞれだけが非対格性を決定付ける観点だとすると，すべての例についてうまく説明できないが，岸本(2000)は，以下のようにすると非対格動詞/非能格動詞について，より多くの例について説明することができるという。

非対格性の条件(岸本2000)

意志性を伴わず，完結性の意味を表す動詞。それ以外の動詞，つまり意志性が伴うか，完結性の意味が含まれ得ない動詞は非能格動詞である[8]。

尚，動詞が意志性を持っている場合は，完結性の如何にかかわらず非能格動詞である。

以上，岸本が提案した非対格性の条件によると，「意志性」「完結性」のどちらかのみを必要とする主張では捉えることができなかった動詞についてもうまく説明ができ，より多くの動詞について説明することが可能となる。

5．まとめ

以上，非対格性に関する主な先行研究の立場と流れを見てきた。岸本(2000)の主張による「意志性」と「完結性」を両方必要とする主張は，これまでの先行研究で挙げられてきたテストに比べ，より多くの動詞をテストすることができるようである。しかし，松本が述べたように，非能格性には意志性が，非対格性には完結性がそれぞれ独立して関係するとなると，果たしてそのレベルの違う二つをまとめてテストすることが妥当なのかという疑問が生じる。さらに，岸本の主張によると，非対格性は意志性と完結性の二つの要因が関わり，それをテストするものとして，「かけ」構文をあげていた。しかし，意志性と完結性の二つが要因であるとなった以上，これら二つの性質をテストするものを別個に行えば，非対格動詞がおのずと見えてくるのであろうか。つまり，意志性のテストと完結性のテストをクリアしたものが非対格動詞であるとすることができるのか，という問題である。また，意志性および完結性によって自動詞を分類すると，a．意志性も完結性も持ち合わせる動詞，b.意志性はあるが完結性のない動詞，c．意志性がなく完結性がある動詞，d．意志性も完結性も持たない動詞といった4つのグループに分類することができることになるが，これら4つのグループのうち，非能格と判断されうる3つのグループ，すなわちa.，b.，d．の動詞のグループをひとまとめにして非能格動詞として扱ってよいのかという疑問も生じてくる。以上のような問題について，今後さらに検討していかなければならないと思われる。

【注】

1）①のようなタイプの自動詞の例としては，他に「生じる，浮かぶ，折れる」などがあり，②のようなタイプの自動詞の例としては，他に「働く，騒ぐ，暴れる」などがあると言われている。

2）数量詞の遊離と非対格性仮説の関連については，三原(1998)が以下のように述べている。通常数量詞とはその先行詞と姉妹関係になければならないという制約があるために，「友達が二人新宿で田中先生に会った」という文を「友達が新宿で田中先生に二人会った」と言い換えることはできないが，深層構造でもともと他動詞文の目的語位置にあるとされている非対格動詞は，「油が10L配管事故で漏れた」を「油が配管事故で10L漏れた」と言い換えることができる。

3）非対格性のテストがうまくいかなかった例については，松岡(2001) pp.15-22を参照されたい。

4）松本(1998)が上記のテストが非対格性・非能格性をテストするのにふさわしくないとして挙げたテストには「関節受身」「PROの解釈」「命令形」「数量詞の解釈」「格助詞の脱落」などといったテストがあり，それらは反例とともに挙げられている(pp. 43-46参照)。

5）松本(1998)は，このことに関して，例えば「壊れる」など，他のテストでは非対格と認定されるのに主語を包含したN-V複合名詞が見つからないケースがあるが，これは動詞は非対格だが，偶然の穴によってそのような複合名詞が存在せず，このテストでは未決となっているとも考えられるとする。

6）岸本(2000)は，「かけ」構文と同じような役割・分布を果たすものに「焼きたてのパン」「切りさしの大根」「食べ頃の梨」があるものの，これらは共起できる動詞にかなりの制限があるとし，すべての動詞を検証する場合にはふさわしくないと説明している。

7）岸本(2000)は，「かけ」構文には「消えかけのろうそく」のような場合の解釈である「開始前読み」(Inception reading)と「読みかけの本」という場合の「途中読み」(Halfway reading)があるが，読みの違いによってどの項が修飾の対象となるかには影響がないために，これら2通りの読みはテストとは無関係であると述べている。

8）日本語の状態動詞を，この主張に当てはめると，意志性も完結性もないために非能格動詞に分類されることになるかもしれないが，岸本(2000)は日本語の状態動詞は一般的にアスペクトを表す動詞や接辞と共起できないために，このテストでは状態動詞の非対格性をテストすることができないと述べている。

【参考文献】

影山太郎(1993)『文法と語形成』ひつじ書房.

岸本秀樹(2000)「非対格性再考」『日英語の自他の交替』pp.71-110. ひつじ書房.

杉岡洋子(1998)「動詞の意味と付加詞表現の投射」『COE形成基礎研究費研究報告：先端的言語理論の構築とその多角的な実証(2)』：pp.341-363.

松岡知津子(2001)『動作性名詞＋「する」構文の構造と意味』広島大学大学院教育学研究科修士論文(未刊行).

松本曜(1998)「日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ」『言語研究』第114号 pp.37-83 日本言語学会発行.

三原健一(1998)『生成文法と比較統語論』くろしお出版.

Burzio, Luigi. 1986. *Italian syntax: A government-binding approach. Reidel.*

Kishimoto, Hideki. 1996. Split intransitivity in Japanese and the unaccusative hypothesis. *Language* 72: pp.248-286.

Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav, Malka. 1995. *Unaccusativity: At the syntax-lexical semantics interface.* Cambridge, Mass.:MIT Press.

Miyagawa, Shigeru. 1989. Syntax and semantics22: *Structure and case marking in Japanese.* San Diego: Academic Press.

Perlmutter David. 1978. "Impersonal Passives and the Unaccusative Hypothesis" *BLS* 4:157-89.

Perlmutter, David and Paul Postal. 1984. "The 1-Advancement Exclusiveness Law,"D. Perlmutter and C. Rosen (eds.) *Studies in Relational Grammer 2,* 81-125. University of Chicago Press.

Toratani, Kiyoko. 1997. Typology of split-intransitivity: Lexical aspect and the unaccusative hypothesis in Japanese. ms. State University of New York, Buffalo.

_____. 1998. Lexical aspect and split intransitivity in Japanese.*CLS* 34: *The main session:* 377-391

Tsujimura, Natsuko. 1991. On the semantic properties of unaccusativity. *Journal of Japanese Linguistics* 13: 91-116.

Van Valin, Robert. 1990. Semantic parameters of split intransitivity. *Language* 66. pp.221-260.

Vendler, Zeno. 1967. *Linguistics in philosophy.* Ithaca: Cornell University Press.

（主任指導教官　水町伊佐男）